

新型コロナウイルス・ ワクチン後遺症とがん

ワクチン後遺症とその対策

藤沼秀光 藤沼医院院長



新型コロナウイルス（**Cov i t 19**）の正体

はじめに、Cov i t 19の歴史を振り返ってみましょう。2019年12月初旬に中国・武漢で発生し、その暮にはインド工科大学からCov i t 19に関する論文が出されました。それは、この新型コロナウイルスのスパイクタンパク

に4つのH I V 遺伝子が組み込まれているというショッキングな内容でした。しかし、この論文は2020年1月に早々と取り下げられてしまい、続いて2月にダイヤモンドプリンセス号事件が勃発したのです。このとき私はCov i t 19は生物兵器でないかとまで真剣に疑い、万全の防疫を迫られたのです。ところが前振りに反して、

この年のCov i t 19の致死率は例年のインフルエンザよりも低かったのです。但しPCRという感染症の診断には通常使わない検査法を用いて、感染者数の大幅な水増しは達成されました。

— mRNAワクチンの登場

こうして人類史上初のmRNA 遺伝子ワクチン登場の初舞台が整

いました。私は20数年前、当時アビジャン大学の遺伝子研究所長であったフランスのモンデール教授から特別講義を受けたことがあります。遺伝子の欠片は単独で容易に動植物のゲノムに組み換わり、遺伝子組換え食品も腸管の組織を組み換えるという事実です。ですから現在では、遺伝子研究の欠片は焼却処分が義務付けされて

います。

それに対して mRNA は、短時間で消去される、DNA には通常逆転写されない、などの反論もありますが、mRNA の構成成分の1つであるウリジンはその異性体であるシユウドウリジンに書き換えられており、長期間持続しますし（事実2年間持続したという報告もあります）、mRNA 生成過程で DNA もわずかに残存してしまします（これが DNA に組み換わる）。

つまり何が起るか誰も想像もつかないのが、この遺伝子ワクチンの凄いとこころなのです。

mRNAワクチンの作用とシエディング

2021年5月よりワクチン接種が開始され、その夏から多数のワクチン後遺症を診るようになりました。症状も病態もさまざまです。初めは手探り状態でした。同月にはシエディング（ワクチン接種者から非接種者への影響）も始まりました。50代の女性 A さんは非接種者ですが、ワクチンを2回接種した医療者の女性とまる1日同席勤務した後から、まるで排尿のよ

たため当院を訪れました。

NLS 機器による治療と対策

早速、筆者が導入しています NLS 機器という量子理論に基づいた生命エネルギー測定装置で、約4時間かけて全臓器の周波数測定分析を行いました。その結果、子宮のスケール値が貧血は0・223、および子宮頸部びらんは0・247と低値を示しました。このスケール値は0・425以下であれば有意

とされ、それより小さいほどその疾患名に近い周波数であることを、スケール値が大きいほどその疾患名とは離れた周波数であることを示します（図1）。

そこで、治療として NLS によるセラピーを行いますと、それぞれ1・164、1・225とスケール値は増大して周波数が遠退きました。つまり、貧血と子宮頸部びらんが遠のいたことを示しました。実際に受診2日後には、それほど酷かった A さんの症状はなんと完全消失してしまいました。このセラピー結果のスケール値は、2021年7月29日の日本統合医療学会栃木支部での講演でも発表しました。

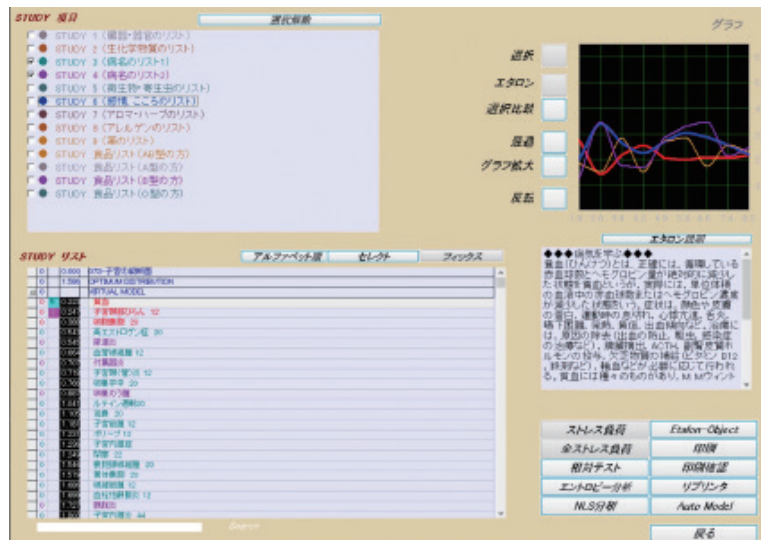


図1

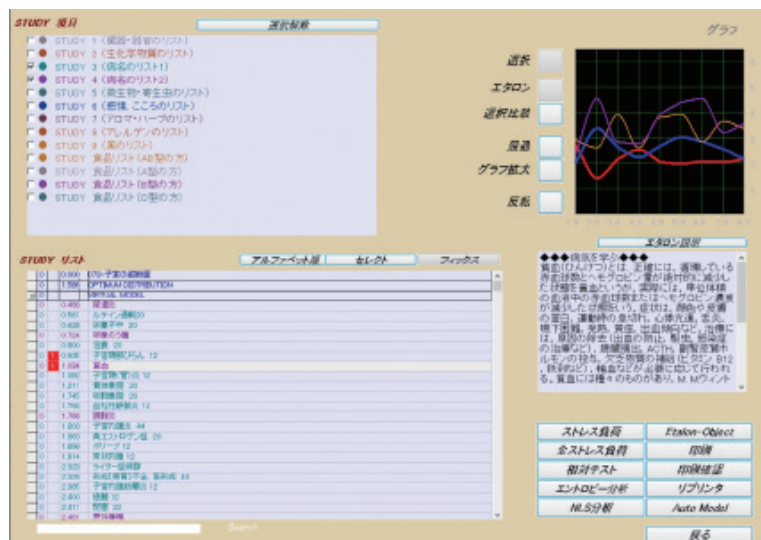


図2

量子もつれ理論の現象と応用

2023年10月に『量子もつれ(エンタングルメント)』に関する論文が、ケンブリッジ大学物理学教室から発表されました。それは「量子もつれ理論により未来で行われる観測により過去の検査結果もそれに呼応して曲げられる」と言う内容です。NLS機器は量子理論に基づいて作動していることから、もしかすると上記のような過去を書き換える現象を起こしたのではないかと推測されます。改めて量子理論は不思議なものです。

ワクチン後遺症とシェディング対策



写真1



写真2

2021年より、この問題に真剣に取り組まれた医師たちが、グルタチオン、フルボ酸、液体ケイ素、バイオアロマ水、それに加えてのNLS治療を行って効果を上げてきました。さらに2023年秋からは「量子もつれ理論」を応用したワクチン後遺症やシェディング対策のための『量子21エナジー水』の臨床応用も開始しました。これは数種類の縦波周波数がある条件下で水に長時間転写したものです。

58歳男性のBさんは、3回目の新型コロナウイルスワクチン接種が2022年4月でした。2023年3月から全身性のアトピー性皮膚炎を発症し治療を行ってきましたが、IGE 1200IU/mL、TARC 1368pg/mL、Dダイマ

19・1 μ g/mLと難治性でした(写真1)。

そこで、同年12月より『量子21エナジー水』を飲水1日60mLと皮膚への塗布を併用したところ、約1カ月後TARC 231pg/mL、Dダイマー 0・9 μ g/mLと急速に低下し、皮膚炎も著明な改善を認めました(写真2)。ワクチン後遺症とシェディングは、臨床上さまざまな様相を呈して一般の医療機関では見過ごされ易い病態です。治療も西洋医学的な手法では困難であり、NLSによる周波数診断と治療、およびデトックスが奏功するようです。今後、後遺症がいつまで持続するかも課題であり、一般検査に加えてNLS機器による診断治療がその鍵を担えると考えています。

新型コロナウイルスワクチン後遺症とシェディングの解消が一日も早く訪れることを切に願います。

1) Nonclassical Advantage in Metrology
Established via Quantum Simulations of Hypothetical Closed Timelike Curves
David R. M. Avidsson-Shukur, Aidan G. McConnell, and Nicole Yunger Halpern-Phys.
Rev. Lett. 131, 150202 – Published 12 October 2023

編集者注：予定していた寄稿者の変更により、急遽、藤沼先生にご寄稿いただきました。67〜69ページの「私のがん治療」ではインタビュー記事も掲載されていますので、こちらもご覧ください。